「傷痕が見えない」

今野和人

登場人物

三上貴弘（３９）　コピーライター

三上晶子（６２）　三上の母親

中村麻美（３８）　美容師

中村幹太（４）　麻美の子ども

三上秋幸（６５）　三上の父親

山脇（２５）　広告会社社員

佐々木（４０）　シェアオフィスワーカー

トレーナー（４２）　加圧ジムトレーナー

バーテンダー（４８）

○三上が住むマンション・外観（夜）

瀟洒な佇まい。

○同・三上の家のリビング（夜）

広々としている。

ソファに座りワインを飲む三上貴弘（３９）の後ろ姿。

レコードでジャズがかかっている。

インターホンが鳴り、三上が舌打ちをする。

○同・オートロックのモニター前

コートを着た三上晶子（６３）が立ってのぞいている。

三上「え？」

三上は受話器をとる。

三上「どうしたの？」

晶子「貴弘？　お母さんお母さん」

三上「急になに」

晶子「とりあえず入れて」

三上「来るなら連絡してよ（オートロックを解除する）」

三上はレコードを停止する。

○同・玄関（夜）

三上がドアを開けると、晶子はトランクを入れてくる。

三上「え？」

晶子「（中に入り）家出してきちゃった」

三上「家出？」

晶子「うん（見渡し）、お、広そう（スタスタ入る）」

三上「家出って」

○同・リビング（夜）

晶子が部屋を見回す。三上が後ろからくる。

晶子「ああ十分十分」

三上「ねえ、どういうこと？」

晶子「しばらく、お世話になります」

三上「は？」

晶子「泊まる部屋くらいあるでしょ」

三上「……明日帰る？」

晶子「家出ってそんなすぐ帰らないでしょ」

三上「なに？　お父さんとケンカ？」

晶子「（テーブル見て）あ、ワイン」

三上「ねえ」

晶子「（キッチンに行き探しながら）そんなせかさないでよ。（グラスもつ）なんかチーズとかない（冷蔵庫開ける）」

三上、苦い顔でワインを飲み干す。

○タイトル「傷痕が見えない」

○シェアオフィス・外観（翌朝）

「Ｏｕｒ　Ｗｏｒｋｓ」の看板。

○同・フロア（朝）

共同スペースでパソコン作業している人たち。

○同・ブースフロア（朝）
中で人が作業している。

○同・ラウンジ（朝）
コーヒーを飲む三上と佐々木（４０）。
佐々木「で、原因はなんだったんですか？」
三上「なんか父親のいびきが我慢できなくなったとか、最近怒りっぽくて嫌とかしょーもない」
佐々木「まあ、我慢の限界だったんですかね」
三上「そんな今更ね」
佐々木「まあまあいいじゃないですか、親子水入らずで」
三上「突然来たのも、『事前に連絡すると断りそう』って。卑怯でしょ」
佐々木「でも掃除とか洗濯とかね」
三上「いや、触られるの嫌なんで何もするなと言いました」

○晶子が家事をやるモンタージュ

ベランダでトランクスを広げて干す晶子。

×　×　×

掃除機をかけながら三上の部屋を物色する晶子。

本棚にアンガーマネージメントの本がある。

×　×　×

コーヒーミルで豆を挽く晶子。

コーヒーを飲みながらスマホで布団を注文する晶子。

○シェアオフィス・三上のブース席

三上がパソコンを操作している。

スマホに着信があり、見ると中村麻美（３８）からのメッセージで「週末、どこ行く？」とある。

○三上の家・食卓（夜）

三上、ハンバーグを見て嫌な顔をする。

晶子「週末、どっか行く？」

三上「なんで」

晶子「なんで？」

三上「実家も東京だし、どっか行くとかないでしょ」

晶子「え、デート？」

三上「（目が泳ぐ）違うよ（ご飯を食べる）」

晶子「おめでとう、どういう人？」

三上「なんでもいいでしょ」

晶子「よくはないでしょいい年なんだから」

三上「今はね、そんな結婚する時代じゃないから」

晶子「そういうけど、けっこう（見回し）稼いでらっしゃいますよね」

三上「そんなことないよ」

晶子「さすが広告代理店様（おがむ）」

三上「……独立したから」

晶子「え、そうなの。いつ？」

三上「２年前くらいか」

晶子「そんな前？　いいとこだったんじゃないの？」
三上「まあ、いずれ独立したかったから」
晶子「ほんとなんも言わないよね」
三上「……そっちこそ、仕事はいいの？」
晶子「わたしいなくても会社回るし」
三上「あ、そう」
晶子「電話１つしてこないしね」
三上、食べている晶子の顔を見つめる。

○同・ベランダ（夜）
スマホで電話する三上。
三上「もしもし」
三上秋幸（６５）「ああ」
三上「昨日も言ったけど、謝ればすむでしょ」
秋幸「（嫌な感じで）え？」
三上「だから言い方きついんだって、最近怒りやすくなってて嫌なんだって」
秋幸「それはお母さんがごちゃごちゃ言うからだろ」

三上「困るんだよ。家にいられると」
秋幸「ちょっとくらいいいだろ。しばらく時間がいるんだよ」
三上「どれくらい？」
秋幸「お母さん次第だよ。こっちは心配ないから」
三上「いや、そっちの心配はしてないし」
秋幸「なんだその言い方」
三上「ああ、たしかに怒りやすくなったかも」
電話切れる。
三上「めんどくさい」
三上が振り返ると、晶子がテレビを見て笑っている。
男性1の声「それでは2週間後に」
○シェアオフィス・会議室（数日後）
三上と取引先の男性2名が向き合って座っている。
三上「承知しました」
男性2「（片づけつつ）三上さんは誰か雇わ

ないんですか」

三上「あー、考えてないですね」

男性１「でも忙しいでしょう」

三上「まあ、１人の方が気楽なんですよ」

○加圧トレーニングジム・外観（夜）

○同・中（夜）

腕にベルトを巻いた三上がトレーナー（４２）の指導のもと険しい顔でダンベルをあげている。

トレーナー「いいじゃないですか、親子水入らずで」

水口「それ思ってないでしょ。どうやったら帰るかな」

トレーナー「え、追い出したいんですか？」

三上「むちゃくちゃ喋ってうるさいですし…

…好きな番組とか動画見れないでしょ」

トレーナー「それくらい、料理とかしてくれるでしょ」

三上「ああ、きつい……でもハンバーグつくるんですよ、嫌いなのに」
トレーナー「え、珍しい。なんでですか？」
三上「それ話すと長く……」
トレーナー「じゃあまたの機会に。ストレッチしましょうか」
三上、立ち上がり、トレーナーに腕を支えられながらストレッチする。
三上「あー」
トレーナー「じゃあ彼女さん紹介したらいいんじゃないですか」
三上「え？」
トレーナー「そしたら気使って、長居はしないんじゃないですかね」
三上「いやー、色々言われそうだしなー。結婚とかそういう話を言ってくるでしょ……そうなるとそれはそれでめんどくさいっていうか――」
トレーナー「三上さんって、お母さん似ですね」

三上「え？」
トレーナー「おしゃべりじゃないですか」
三上「……」
三上、黙ってストレッチする。
○三上のマンション・リビング（夜）
晶子がテレビを見ている。
三上が入ってくる。
晶子「おかえり」
三上「あー」
晶子「このドラマ面白いね」
三上「え？　ああ（テレビ見て）、まだ全部——」
晶子「まさか神父が吸血鬼なんてね」
三上「え？」
晶子「びっくりしちゃった」
三上「いやいやいやいや」
晶子、構わずテレビを見ている。
三上「俺そこまで見てないから」
晶子「え？」

三上「何でネタバレすんの」
晶子「あー、ごめん、忘れて」
三上「忘れられないでしょ」
晶子「わかってても面白いから」
三上「最悪だよ」
三上、自室に引っ込む。

○シェアオフィス・三上のブース席（数日後・朝）
三上がスマホを耳にあてている。
三上「はい……わかりました。そうですね今日夜１０時までには送ります……え？　全然大丈夫ですよ、はい、いえいえ、じゃ失礼します（スマホ切る）大丈夫なわけねーだろ」
三上、頭をかき、パソコンに向かう。
×　×　×
カップ麺を食べる三上。

○本屋・本棚
三上が本をいくつか抱えている。

○カフェ（夕）

三上がノートパソコンを広げながら本を読んでいる。

○シェアオフィス・三上のブース（夜）

三上がパソコンの前で悩んでいる。

×　　×　　×

三上がキーボードを入力し、力強くエンターキーを押し、イスにもたれかかり宙を見る。

女性たちの笑い声がして――

○三上のマンション・玄関（夜）

女性ものの靴がたくさんある。

○同・リビング（夜）

晶子ほか４名の同年代の女性が食卓でコーヒーを飲んでいる。

晶子「あの子、うそつくときバレバレで。目

が泳いでふっと黙って、ぱくって食べるの」

女性たち笑う。

女性１「かわいいじゃないねえ」

女性２「こんな立派なとこ住んでるし」

女性３「結婚しないのかな」

女性２「今あんまりねえ」

晶子「彼女はいるみたいなんだけどねえ（うれしそうに）」

女性４「そりゃいるわよ」

晶子「いや、あの子全然、全然もてなかったのよ」

女性４「いまは違うでしょ」

女性２「同じ業界の人かな」

晶子「わかんない。週末デートするみたいだけど、紹介する気なさそうだし」

女性３「じゃあ尾行しちゃえば」

女性たち笑う。

晶子「そんなまでして知りたくないわよ」

玄関のドアが開く音。

晶子「あ（立ち上がる）」

女性たち、だらっとした姿勢をただす。

○同・玄関～廊下（夜）

三上、女性たちの靴を見て踵を返してマンションの廊下にでる。

晶子もマンションの廊下に出る。三上はエレベーターに乗り込む。

晶子「いま手話やってたときの友だち来てるから、挨拶」

三上「いいいい（エレベーター閉める）」

女性１が出てくる。

女性１「悪い悪い、帰る帰る」

晶子「いいいい、逃げちゃったから」

○バー・カウンター（夜）

酒の入ったグラスをもつ三上。

三上「家出ってそんな楽しいもんですか」

バーテンダー（４８）「ちょっとした開放感があるんじゃないですかね」

三上「こっちは窮屈ですよ」

バーテンダー「まあいいじゃないですか、親子水
入らず――」
三上「もういいよそれ。おばさんたくさんいて、水入らずでもないし」
バーテンダー「ああ、すいません」
三上が酒を飲んでグラスを空にする。
○三上の家・空のコーヒー豆のびん（夜）
を三上が見る。
○同・晶子の部屋の前（夜）
コーヒー豆のびんをかかえて三上がノックする。眠そうな晶子が出てくる。
晶子「なに？」
三上「なんで全部飲むの？」
晶子「それ、みんなおいしいって言ってた」
三上「ドリンクバーじゃないから」
晶子「あ、ドリンクバーみたいね」
三上「違う違う。わざわざ専門店で買ってき

てるの。で、今週はもう買いに行く時間ないの。明日飲めないよね、帰ってきて飲むのが習慣――」

晶子「眠い、もうお母さん明日早いから（ドア閉めてかぎかける）」

三上「もう帰れよ、家出先で充実するなよ」

○同・外観（翌朝）

○同・リビング（朝）

三上が寝室を出てくると、食卓に朝食の用意と「友だちの家に行ってきます」というメモがある。

三上「友だち多いな」

○同・外（朝）

三上が出てきたところを茂みに隠れていた晶子が追いかける。

○地下鉄の駅・ホーム（朝）

三上がスマホを見ているのを離れたところから見ている晶子。

○渋谷の雑踏

三上の後ろを歩く晶子。

○代々木公園・けやき並木通り

三上が植え込みの前に座って待っているのを見る晶子。

麻美が息子の幹太（４）と手をつないでやってきて、三上の前に立つ。

三上は立ち上がり、幹太と手をつなぎ、３人並んで歩き出す。

晶子は吸い込まれるように３人のあとをつける。

○同・森林の中のベンチ

三上と麻美と幹太が弁当を広げている。

麻美「すごいね、家出って」

三上「参っちゃうよ」

幹太「家出ってなに？」
三上「家を出たまま、帰らないこと」
幹太「だめじゃん」
三上「だめなんだよ」
麻美「でも理由があるから、だめじゃないの」
幹太「え？　帰らなくていいの？」
三上「ダメだよ帰らなくちゃ」
麻美「でもいいじゃない、親子――」
三上「もう水入らずやめて、聞きたくない」
幹太「水入らずってなに？」
三上「うざいってこと」
幹太「だめじゃん」
麻美「うそ教えないでよ。２人きりってこと」
三上、おにぎりを食べる。
三上「まあでも年はとったよ。まず毛量が減ったね」
麻美「……挨拶したほうがいいかな？」
三上「え？　まだいいよ」
麻美「まあ、言いにくいのはわかりますけど――」

三上「そういうわけじゃないけど」
麻美「後ろ向きだなー」
幹太「後ろ向きだなー」
三上「いや、別にいいけどさ」
麻美「だっていつかは……」
三上「そうだろうけど急に家出してきたから心構えっていうか――」
幹太、おにぎりを食べながら三上と麻美を交互に見る。

○同・木の後ろ
晶子、麻美と幹太が広場でフリスビーをしてるのを微笑ましく見ている。
晶子のスマホが鳴り、画面を見ると三上の名前が表示。
三上がスマホを耳にかざしている。晶子、通話ボタンを押す。
晶子「もしもし」
三上の声「もしもし、今大丈夫」
晶子「あ、うん、なに」

三上の声「いや、今日じゃなくてもいいんだけどさ」
晶子「うん、なに？」
三上の声「あれか、友だちと夜まで一緒？」
晶子「いや、夕方には帰るけど」
三上の声「ああそう。まあ来週とかでもいいんだけどさ」
晶子「なによ」
三上の声「だからまあ、彼女と一緒なんだけど、夕飯でも一緒にどうかって」
晶子「あ、あ、そう」
三上の声「急だし、まあ今度でも」
晶子「今日でいいんじゃない？」
三上の声「ああそう？　じゃ、まあ家でいいかな」
晶子「あ、じゃあわたしも早く帰れたらなんか作ってもいいし」
三上の声「うんこっちもなんか買って帰るし。でさ、あの～……」
晶子「なによ」

三上の声「その人、子どもがいるんだよね」
晶子「そうよね」
三上の声「え？」
晶子「あ、そうなんだ、へー」
三上の声「あ、そういう感じ」
晶子「いいじゃない、わたし子ども好きだし」
三上の声「そっか、じゃあ5時とか6時くらいに」
晶子「オッケーオッケー、はーい」
晶子、3人を見る。

○同・広場
フリスビーをする3人。
麻美「言った？　幹太のこと」
三上「うん」
麻美「どんな感じ？」
三上「へーって感じ。わたし子ども好きだしって」
麻美「大丈夫かな、あ、服どうしよ」
三上「いや、平気平気。お母さんきれいだよ

ね？」

幹太「うん、きれいだよ」

香織「ありがとう」

宙を舞うフリスビー。

○三上の家・玄関（夕）

晶子が大量の買い物袋をもって入ってくる。

揚げ物の音が先行し――。

○同・キッチン（夕）

ポテトを揚げるうれしそうな晶子。

○同・玄関（夕）

買い物袋を持った三上がドアを開け、

麻美と幹太が中に入る。

麻美「（物音を聞き）ねえ、もう帰ってるみたい」

幹太「おじゃましまーす」

幹太がすたすた中に入る。

麻美「ちょっと待って」

○同・リビング（夕）

幹太が見上げたあと、正面を見る。

しゃがんで幹太を見る晶子。

晶子「こんにちは」

麻美が後ろから来て、

麻美「はじめまして、中村麻美ともうします」

幹太は麻美の横にくっつく。

晶子「三上の母の晶子です」

三上がくる。

晶子「あ、お子さんのお名前は？」

麻美「（幹太に）お名前は？」

幹太、麻美の後ろに隠れる。

麻美「すみません」

晶子「びっくりしちゃうよね、知らない人がいて」

三上「早かったね」

晶子「まあね」

三上「いろいろ買ってきたけど」

晶子「ああ、じゃあ並べよっか」

○同・食卓（夕）

ずらりと並んだ刺身やカニや揚げ物、サラダ、ローストビーフやシュウマイ、エビの味噌汁など豪勢な食事。

幹太「お誕生日みたい」

麻美「ね。すみませんなにもせず」

晶子「いえ、時間ちょっとあったから」

幹太「ポテトある」

晶子「そう、お子さんいると聞いたから（幹太の前に出す）」

幹太「でも皮ついてるよ」

麻美「皮もおいしいから」

幹太「汚いよ」

麻美「汚くないから、食べてみて」

晶子「あ、皮とってあげようか」

麻美「大丈夫です、ね」

三上「最近あんまついてるのないから」

晶子「そっか、とっとけばよかったね」

幹太「（食べて）うん、おいしいね（麻美に）」
晶子「よかったー」
麻美「ママじゃなくちゃんと伝えて」
幹太「ありがとう」
晶子「どういたしまして」
晶子、指で目の端を払う。
三上「大げさな」
晶子「ほんと気持ちわかんないよね。大丈夫ですか？（麻美に）」
麻美「優しいです」
晶子「優しいふりかも」
麻美、笑う。
三上「なんでそんなこと言うの」
晶子「まあ食べて食べて、ね」
麻美「いただきます」
幹太「ママ、からあげ」
麻美「取ってって言って（からあげ渡す）」
晶子「どこ行ってたの？」
三上「代々木公園でフリスビーして」

晶子「フリスビー？」
三上「知らない？　投げるやつ、円盤の」
晶子「一切見たことない」
三上「そんなことはないと思うけど」
麻美「あとでお見せします。あの、えびのお味噌汁すっごいおいしいです」
晶子「あ、よかったよかった」
三上、晶子と麻美と幹太の顔を見る。
×　×　×
湯飲みに入ったお茶が並ぶ。
ソファで三上と幹太はスマホゲームをしている。
晶子「大変でしょう、美容師さんだと朝から晩まで」
麻美「あ、でもお店は理解あって早めに帰してくれるので」
晶子「そう。わたしもそろそろ切りたいんだけど、家の近く行ってたから、なんかね」
麻美「じゃあ、わたし切りましょうか」
晶子「え？」

麻美「ここでも切れるので」
晶子「いやいや、プロの人にそんな」
三上「そうだよ、そんな気使う必要ない」
麻美「じゃあ、うちの店けっこう近いので、気が向いたらお店にいらしてください（名刺出す）」
晶子「え、いいの」
麻美「ええ、ぜひ」
晶子がもつ名刺。

○駅付近の道（夜）
三上と麻美と幹太が手をつなぎながら歩いている。
麻美「大丈夫だったかな」
三上「大丈夫でしょ」
麻美「そっか。でも言えなかったね」
三上「なにが」
麻美「だから、バツ1じゃないって」
三上「そんなにいきなりは」
麻美「まあそうか……（駅の入り口にくる）

今日はここで」
三上「ああ、じゃあまた。またね（幹太に）」
幹太「バイバイ」
麻美と幹太が階段を降りるのを見送る
三上。
○三上の家・リビング（夜）
ソファに座りながらスマホを見る三上
と食卓のいすに座ってお茶を飲む晶子。
晶子「美容室で出会ったの？」
三上「普通にマッチングアプリで」
晶子「まあ、いいじゃない。今離婚なんて、
気にするようなことじゃないし、なんかほ
っとした」
三上「そりゃよかったけど」
晶子「1年半くらい？　つきあってるならい
いんじゃない？　年だし」
三上「そうねえ」
晶子「……そろそろ帰るかな、邪魔でしょ」
三上「まあ」

晶子「彼女の店に行ったらイヤかな？」
三上「どうだろ、偵察と思うんじゃない？」
晶子「そっか。（立ち上がり）おやすみー」

○シェアオフィス・ラウンジ（数日後・朝）
佐々木と三上がコーヒーを飲んでいる。
佐々木「いつお母さん帰るんですか」
三上「今週末には帰るみたいで」
佐々木「帰る前にどっか行けばいいのに」
三上「どっかって、母も東京ですから」
佐々木「だからそれは、おいしいお店とか」
三上「あ〜」

○和食料理店・外観（数日後・夜）
風情があり高級そうである。
晶子「なんかあの日からうれしくなっちゃって」

○同・個室（夜）
三上と晶子が向かい合って座っている。

あらかた食べ終わった様子のテーブル。
お銚子がいくつかあり、晶子も三上も
若干酔っている。

三上「気が早いな」

晶子「全然もてなかったじゃない、高校だって大学だって」

三上「いいんだよ」

晶子「俺は人が当たり前にできることができないんだよって、よく言ってたじゃない。
それ聞くたび、この子ずっと1人なのかなと思ったんだよね」

三上「よく覚えてんな」

晶子「……結婚しないの？」

三上「そのうちね」

晶子「なんで離婚したか聞いてる？」

三上「一応ね」

晶子「一応教えてよ」

三上「まあ、男がどうしようもない奴だったんだよ」

晶子「あんたもそんないい男じゃないでしょ」

三上「俺は子どもに手を出すやつじゃない」
晶子「そんな奴か、別れて正解」
三上「その前はなんだっけな、別れてからストーカーされたらしいけど」
晶子「……え、２人？」
三上「……」
晶子「バツ２？」
三上「……ああ」
晶子「そっか、だからか」
三上「え、だからってなに。運が悪かっただけでしょ」
晶子「でも、１ならともかく２はね」
三上「え？　今言ったよね、男が幹太に手出したり、ストーカーするような奴だったり」
晶子「だけどまあ、２度あることは３度あるっていうし」
三上「三度目の正直もあるでしょ、何言ってんの？」
晶子「でも、自分でもそう思えないから、ぐずぐずしてるんじゃないの」

三上「……」
晶子「結婚に向いてない人もいるから」
三上「自分だってそうじゃない？　その年で家出なんかして」
晶子「そうね」
三上「あのね、いびきとか怒りっぽいなんて、解決できない問題じゃないから。彼女のような暴力を受けた被害者からすると、ものすごい小さいどうでもいい問題、はっきり言って。その被害者に向かって責任があるような言い方はね二次被害なの、知ってる？　二次被害って」
晶子「はいはい、賢い賢い」
三上「え、親父から逃げてどうすんの？　離婚するの？　実際、ひとりじゃ暮らせないでしょ。我慢するしかなくない？」
晶子「……」
三上「いきなり家なんか来られても迷惑でしかないから」
晶子「（静かに）どこが優しいんだよ（立ち

上がりそそくさと出て行く）」
三上「え（立ち上がる）」
晶子「トイレ」
三上、所在なさげにする。
○加圧トレーニングジム（翌日・夜）
三上はトレーニングをしながら渋い顔。
トレーナー「それじゃお母さん、そのまま実家にも帰ってないんですか？」
三上「ええ。どこ行ったんだか」
トレーナー「いや、筋肉つくってる場合じゃないでしょ」
三上「大丈夫ですよ。友だちは多いんで」
○バー・カウンター（夜）
三上が静かに飲んでいる。
バーテンダー「今日はお静かですね」
三上「いつもそんなうるさいですか？」
バーテンダー「いえ。いつも楽しいお話を聞かせてもらっているので」

三上のスマホが鳴る。麻美と表示される。三上、外の扉を開ける。

○同・外（夜）

三上「もしもし」

麻美の声「もしもし、お母さん、今家いる」

三上「え？」

麻美「昼間に美容院にトランク持ってきて」

○美容室・席（麻美の回想）

晶子の髪を切る麻美。

麻美の声「昔の話とか家出の話とか今度は貴弘の家を出たって話聞いて、泊まってもらおうって思ったの」

○バー・外

三上「なにそれ。ごめん、今から行くから」

麻美「やめて。お母さん傷ついてる」

三上「え、でも」

麻美「今は会いたくないだろうし、わたしも

会いたくない」
三上「ああ……」
麻美「なんであんな冷え切った言葉を投げられるの、傷ついて家出してきた人に」
三上「言いすぎたけど」
麻美「けど何？　そもそも家出してきたとき、ちゃんと聞こうとした？　何年も我慢してもう無理な感じとか、優しかった人が怒りっぽくなって、お母さんばっか言われるつらさ、さびしさ、そういう全部、何１つ聞いてないよね」
三上「そこまで言わなかったから」
麻美「聞こうとしない人には話せないでしょ」
三上「……」
麻美「そういうことだから（電話を切る）」
呆然とする三上。

○麻美の家・リビング
幹太に絵本を読んでいる晶子。

○三上の実家の印刷工場・外観（数日後・朝）
３階立てである。

○同・１階工場
職人が２人、機械を動かしている。

○同・３階家
洗い場に溜まった食器やインスタント麺のカップ。
×　×　×
洗濯機の中に溜まった衣類

○同・リビング
三上が食卓のいすに腰掛けている。
三上「土曜日も動かしてるんだ、工場」
秋幸は立ってポットからドリップコーヒーにお湯を入れている。
秋幸「ああ、交代で入ってもらってる」
三上「大変？」
秋幸「今時どこも質は変わらないから、価格

競争しかない」
三上「ホームページ新しくしたほうがいいよ。古くて重いし、どういう想いでやってるのか伝わらないし」
秋幸「ああ」
三上「なんだったら、協力してもいいし」
秋幸がドリップパックを捨てて食卓にカップを持ってくる。
秋幸「まあ、そんなこと話しにきたんじゃないだろ」
三上「電話で話したけど、俺がひどいこと言ったせいで、お母さんが出て行った」
秋幸「ああ」
三上「……一緒にお母さんに謝って、謝るだけじゃなく態度を改善してほしい」
秋幸「それな、そもそも見てないだろ？　なんで一方的に俺が悪いといえるの」
三上「いや、お母さんには頭にくるよ。話長いし、図々しいし」
秋幸「そうだろ、暮らしてわかったろ」

三上「それでも暴言は暴力だし、それは心を
壊すから――」
秋幸「だからそこまでのことを言ってないよ。
見てないだろ？」
三上「見てないけど、想像できる」
秋幸「なんで」
三上「あの時、ひどいって意識なく言ってた、
やってたから」

○広告会社・三上のデスク（三上の回想）
座っている三上（３６）の前に山脇
（２５）が立っている。
三上「これさ、全然購買層のニーズを掘り起
こしたキャッチコピーじゃないよね」
山脇「すみません」
三上「すみませんじゃなくて今週何やってた
んだよ（紙を投げる）」
山脇「……すみません」
三上「何やってたかって聞いてんだけど」
山脇「競合との比較をしたり、グループイン

タビューしたり」
三上「じゃあ聞けてないんだよ。金むだに使うねー」
山脇「すみません」
三上「で、出してくるコピーも少ない。なんでこんな少ないの」
山脇「自信があるのがそれで」
三上「バカかよ。お前はわかってないんだから、たくさん出しておれが選ぶの」
山脇「すみません」
三上「いまのところ、ここに存在してる価値ないからね」

○同・会議室（回想）
長机に複数人、座っている。
三上「デザインはいいよね」
デザイナー「ありがとうございます」
三上「でもコピーがしょぼいんだよな」
山脇「すみません」
三上「これさ、むしろコピーないほうすっき

りしてよくないか」
男性1「あー、逆に」
三上「ちょっと消してみて（パソコンを操作してる隣のスタッフに）あ、いいいい、全然こっちのがいい」
男性2「ま、でもコピーないのはちょっと」
山脇「あの、申し訳ないんですけど、書き直すのでもう少し待ってもらえませんか？」
三上「でも、待ってもいいの出ないでしょ」
山脇「なんとか、出します」
三上「ええ？　進行的にはどうなの？」
女性1「明後日朝までならギリギリ」
山脇「お願いします」
三上「みんな早く帰りたいんだよ。働き方改革できないじゃん」
山脇「すみません」
三上「学生のときあんなでかい賞とったからさ、みんなで期待してたんだよ」
山脇「はい」
三上「あれがピークだったね」

山脇「……」
三上「賞とるために仕事してないからな、お前以外」
山脇「僕もしてないです」
三上「じゃあもっとデザインとニーズとクライアントの訴求ポイント押さえた、プロのコピー書いてきて。明日まで何本？」
山脇「……５０本は」
三上「１００本で。俺新人のころもっと書いたよ」
山脇「わかりました」
三上「さっさと始めて」
山脇、力なく外に出る。

○麻美の家
幹太は昼寝している。
麻美「彼の部下の人がそれで休職したそうです。適応障害になって」
晶子、二の句が継げない。
麻美「……彼と出会う前の話で、普段はそん

なこと言わないですけど。でも、お母さんの話を聞いて、やっぱどこかまだ信用できないかなって」

晶子「わたしはそんな大したこと言われてないけど」

麻美「でも、実際彼の家を出たじゃないですか」

晶子「……人のこと見下して、何もかも全部間違ってるみたいに」

麻美「間違ってないです。見下すなんておかしい」

麻美、晶子の手に手を合わせる。晶子が麻美と目をあわす。

○三上の実家・リビング

秋幸「それで会社辞めたのか」

三上「実質クビだけど」

秋幸「まあ、しょうがない」

三上「……昔上司から、『秀才だけど独創性はない』ってバカにされて、ショックだっ

た。自分ではあると思ってたから……で、後輩でオリジナリティとかセンスあるやつに言いたくなる、嫉妬して。いや、自分のような奴にもいいたくなる。自分はもっとやったぞって」

秋幸「そんなつらくあたってたのか」

三上「あのときは自覚なかった」

秋幸「でも、俺は実際大したこと言ってないよ」

三上「それは言う方が判断することじゃないんだって。多分、言われるほうでもない。やったこと、言ったこと、言い方そのものがダメで」

秋幸「そんなの、どうやって決めるんだよ」

三上「人に言っちゃいけない言葉ってあるだろ」

秋幸「……言われるほうに問題ないのか？」

三上「でも、間違いを言うんじゃなくて、人格まで責めてない？」

秋幸「それは知らない」

三上「知らなきゃだめだろ」
秋幸「……」
三上「ていうか、昔はそんな怒らなかったと思うけど。穏やかだったでしょ」
秋幸「まあ歳だし会社もあれだし、言い訳かもしれないが――」
三上「言い訳言い訳。いびきなんか病院行けば治せるから、行かない意味がわからない」
秋幸「……なんか、お前の言い方腹立つな」
三上「ええ？　気使ってんだけどな」
秋幸「お前も相当だよ」

○麻美の家
晶子「え、あの子ハンバーグ嫌いなの？」
麻美「なんか毎回ファミレスで別れ話されるそうなんですけど、毎回相手がハンバーグ注文するみたいで」
晶子「え、何それ」
麻美「なんなんでしょうね」
晶子「……あの子と別れるの、体力使うのか

もね」

麻美「そうですね」

2人、笑うと幹太起きる。

幹太「なに笑ってんの？」

麻美「今晩ハンバーグにしよっか」

幹太「やったー！」

香織のスマホが鳴る。「父親といっしょに謝らせてほしい」と三上からのメッセージが表示。

○秋幸の車の中（夕）

秋幸が運転しており、三上は助手席にいる。

赤信号になり、車が停車する。

秋幸「しかし、なんて言えばいいか」

三上「帰ってきて欲しくない？」

秋幸「まあ、部屋もだいぶ汚れてきたし」

三上「あー、いちばんダメそれ。家事のために帰れっていうの」

秋幸「いや、照れだろ」

三上「そういうのいいから。とっくに昭和終わってるから」

秋幸がなにか考える顔。

青になり、車が発進する。

○公園・ベンチの前（夕）

小ぶりな敷地。

ベンチに座る麻美。

晶子と幹太がフリスビーを投げている。

幹太が投げたフリスビーが晶子の頭上を越えていく。

○同・入り口付近（夕）

晶子が追いかけると、秋幸がフリスビーを拾う。２人、近づく。

秋幸「……久しぶり」

麻美「うん」

幹太「投げてー！」

秋幸、フリスビーを晶子に渡す。

晶子、フリスビーを幹太に投げる。

三上「先、お父さんが謝るから」
　三上、麻美と幹太のもとに歩いていく。
秋幸「すまなかった、言い過ぎた」
晶子「目を見て、言ってください」
　２人、向き合う。
秋幸「……悪かった」
晶子「はい」
秋幸「……態度も改めるよ」
晶子「これから２０年くらい、家であんな感じで言われて生きるの、もう嫌になったの」
秋幸「ああ」
晶子「でも情けないけど、一人で生きていくほど稼げないのよね」
秋幸「そんなこというなよ」
晶子「でも、できる？　今から変われる？」
秋幸「……」
晶子「あの子に言われて、謝ってるだけじゃないの」
秋幸「帰ってきてくれ」
晶子「なんで」

秋幸「耐えられないからだよ、お母さんなしの人生に」

晶子、目を伏せる。

秋幸「あきらめないでくれ……晶子」

晶子、目をあげる。

○同・ベンチ前

三上が麻美に近づく。

麻美「ちょっと一人で遊んでて」

幹太はなにか察知し、ブランコに向かうも

幹太「（麻美と三上に）あとで来てよね（走っていく）」

三上「いろいろわかるんだね」

麻美「意外にね」

三上「気持ちがわかる子なんだな。俺と違って」

麻美「本当にわからないの？」

三上「言ったあとで、後悔した」

麻美「前の夫も幹太を叩いたあともうしない

っていうけど、しばらくするとまた……DVなんかしないってバカにしてるんだろうけど」

三上「いや」

麻美「同じだよ、繰り返すなら。繰り返すなら反省も謝罪も意味ない」

三上「うん」

麻美「部下の人病気にしたこと悔やんでたじゃない、お父さんの言葉で傷ついて家出したんじゃない、なのになんで」

三上「麻美との結婚を否定するから」

麻美「でもすり替えたよね、お母さんの家出の話に」

三上「ああ」

麻美「勝とうとするなよ。なあ、ずるして、傷つけて、勝とうとするなよ」

三上「……」

麻美「バツ２との結婚なんて反対するの当たり前じゃん。自分だって、ひるんでるでしょ」

三上「……俺はその、本当は自信ないんだよ
……臆病かもしれない」
麻美「知ってるよ、バレバレだよ、彼氏だもん」
三上「そっか」
麻美「まずそれ認めて。認めても嫌いにならないよ」
三上「うん」

○同・入り口付近
晶子と秋幸、麻美たちを見る。
秋幸「どうなんだ、相手の子は」
晶子「苦労してるけど、嫌なことを我慢しないし、お父さんと同じで街中華好きだし、わたしは好き」
秋幸「そうか」
晶子「バツ２だけどね」
秋幸「え？」
晶子「それだけ幸せになるため一生懸命ってことでしょ」

秋幸「ずいぶんポジティブだな」
晶子「心配なのは息子のほうでしょ」
　三上、晶子のもとに走ってくる。
三上「ごめんなさい。ひどいことを言ってしまいました」
晶子「ああ、パワハラしたのにね」
三上「もう、人を攻撃して自分を守ろうとするの止めます」
晶子「そう言うだけじゃない？」
三上「弱さを認めて、なんというか、自分が傷ついたなら傷ついたと言えるようになるというか」
晶子「彼女にそう言われたの？」
三上「まあそう。傷つけた人は傷ついた人に学ぶのがいいでしょ？」
晶子「そうだろうけど、なんか言い方がね」
秋幸「嫌な気持ちになる」
三上「……」
幹太の声「おーい、まだ～」
　幹太がみなに向かってフリスビーを投

げる。
宙を舞うフリスビー。
三上と麻美が追いかけて２人でキャッチする。見つめあう２人。
三上「もう、もうくり返したくない。力を貸してほしい」
麻美がうなづく。
麻美と三上が２人でフリスビーを投げる。
フリスビーを幹太がキャッチする。

○シェアオフィス・ラウンジ（数日後）
佐々木「それでお父さんとお母さん、仲直りしたんですか？」
三上「一応実家には帰りました。父親はいびきの治療してるみたいですし」
佐々木「よかったじゃないですか」
三上「暴言言ったら僕の彼女に報告して息子に会わせないという罰を与えるって」

○加圧ジム

トレーナー「ああ、お父さんからしたら孫ですもんね、かわいいでしょう」

三上「まだ婚約もしてませんけど」

トレーナー「でも、家族ぐるみのつきあいでいいじゃないですか」

三上「ええ。でも大変ですよ」

トレーナー「なにがですか」

三上「絵本を読むことが」

○麻美の家（夜）

幹太は奥の寝室で寝ている。

三上「（絵本を広げ）『とらはいいました。ごめんください。ぼく　とてもおなかが　すいてるんです……」

麻美「ねえ、今照れたでしょ」

三上「いや、照れるでしょ」

麻美「照れたら子どもは覚めるから。はい、もう1回」

○三上の実家（夜）

秋幸が絵本を読んでいるのを晶子が指導している。

三上の声「刑務所の更正プログラムであるらしいんです。絵本を読むのを練習して、録音した音声を子どもに届けるというのが」

バーテンダーの声「へー、刑務所の更生」

三上の声「絵本の声を想像すれば相手の感情を聞く練習になるし、どういう声で読めばいいか考えながら読むと、感情を伝える練習にもなるみたいです」

○バー（夜）

バーテンダー「いろいろすごいですけど、単純に照れませんか？」

三上「ものすごい恥ずかしいです」

バーテンダー「お父さん、よくやりますね」

三上「それをやることが帰る条件でもあったんです」

バーテンダー「大変ですね。音声録音するん

ですか？」

三上「いや、彼女の子どもに直接読んであげる予定なんですけど、なかなか彼女の許可がおりないんです」

バーテンダー「厳しいんですね」

○三上の自宅・リビング（夜）

三上が絵本を読んでいる。

三上の声「なんか読めない箇所が多いんですよ。普段の自分の中にない声だなっていう。で、違う、新しい声を探そうとするんですけど、なかなか見つからないんです」

○三上の実家（数日後）

晶子が電話している。

晶子「お父さん本当下手。全然感情が乗らないし、全員同じ声で喋るし。全然カンちゃんに聞かせられないレベル」

○麻美の家

スマホで話している。

麻美「いや、貴弘もひどいですよ。うまく読もうとかっこつけてナレーションみたいっていうか」

○三上の実家

晶子「でもあれね。自分たちが何を言ったか、本当のところ、わかってないでしょと思うんだけどね。傷あと、見えないじゃない」

○麻美の家

麻美「そうですよね、実際……でも何年後かに、ふっと伝わるかもって。自分もあるんです。朝、妙に早く起きて昔のこと思い出して、あのときあの人こういう風に傷ついてたんじゃないかなって」

○三上の実家・２階オフィス（数日後）

晶子「コピーライターって、人の話を聞いって書くんじゃないの？」

三上「そうだよ」
晶子「なんでそんな聞かないのよ」
三上「んー、コピーを書くため、つまり課題を解決するために聞いてるから。普段大事なのは、ただ聞いて理解することらしい」
晶子「男の人ってすぐ解決しようとするもんね」
三上「男と限定するのはよくないけど。権力もってる奴ほどろくに聞かず、口だけ出したがるね」
晶子「最悪ね」
三上「さ、そろそろ仕事の話を」
晶子「はいはい」
三上のパソコンの画面には「新サイトコピー案」と表示。
三上「この会社のいちばんの強みってなにかな」
晶子「そうねえ、強み……」
三上、考え込む晶子を見てパソコンを閉じる。

三上「なんかもうちょいあれ、雑談しよっか」

晶子「え？」

三上「……幹太と何話したの？　彼女の家に泊まったとき」

晶子「え？　もうあんま覚えてないけど――」

晶子が話すのをお茶を飲みながら聞く三上。

（了）

参考文献

『おちゃのじかんにきたとら』（ジョディス・カー作、晴海耕平訳・童話館出版）